

国際協力の現場を担う志高き人材を



聞き手／キャスター・エッセイスト●ふくしまあつこ

福島敦子

公のために生きる精神

福島 いま、日本の大学の数が非常に多く、その分、一つの大学が持っている個性が希薄になってきています。そのなかで拓殖大学は、設立の歴史の経緯も含めて非常に個性の強い大学ではないかと思えます。学長はこの拓殖大学の教育理念は、どういうものだと考えてらっしゃいますか。

渡辺 わが大学は明治三十三年（一九〇〇年）に台湾協会学校として創立されました。台湾は日清戦争で日本が勝利し、清国から割譲を受けた日本初の海外領土です。明治の指導者たちは、日本ではできない改革をこの新天地台湾で展開

しようと考えたのです。台湾の開発と近代化のための人材育成を目指し、桂太郎、後藤新平、新渡戸稲造ら赫々たる明治の指導者が本学の創設にかかりました。拓殖とは「開拓殖民」。まさにフロンティア開発が建学の精神です。そういう来歴の大学ですから、戦前期はその輝かしい成果が世に高く評価されました。しかし戦後期は逆風の中に置かれました。植民地統治のための人材を育成したかのような受け取られ方をされ、一時は校名の変更まで余儀なくされたほどでした。しかし、東西冷戦が崩壊して十数年、現在の拓殖大学には順風が吹いています。開発途上国の「開発」が、イデオロギ―抜きで日本の新しい「国是」になっていきます。いまこそ、建学の理念をより明晰なメッセージとして世の中に発信した

いと考えています。

福島 拓殖大学の本来持っている個性を前面に出していく。その象徴的な存在が二〇〇〇年に新設された国際開発学部ですね。

渡辺 国際開発学部はいつてみれば拓殖大学拓殖学部といふべきものです。留学制度、特に春休みを使った短期留学に重点を置いています。マレーシア、インドネシア、中国、韓国、フィリピン、この五か国に各三十人くらいを一カ月間送っています。一学年三百人の定員で、主に一年生が対象ですから、半分の学生が春休みに外へ出るんですね。初めて開発途上国の開発の現場を体験し、またその貧困に触れて深く心動かされるものがあるようです。

フィリピンなどでストリートチルドレンの世話をしたり、スモーカーマウンテンへ行って子供たちのサークルを作ったり。いまの学生たちは、他人のために何かいいことをしたいという気分は、私どもの時代に比べてはるかに強い。ところが何をしたいかわからない。それに道筋をつけてやると、非常にいい成果を持ち帰ってきますよ。リピーターになって、フィリピン語やインドネシア語などの検定試験で高得点を取る学生も出ていますしね。

福島 将来、国際社会、とくに開発途上国を中心にその国、その土地のために働ける本当の国際人、国際協力のプロフェッショナルを拓殖大学からどんどん育てていきたいということですね。

渡辺 ええ。私は戦後日本の教育の中で一番欠けていたも

のは「公」の精神だと思えます。私的に生きていたのでは本当の意味での人生の幸せはつかめないことが、海外での経験を通じて分かってくるんですね。貧しい人々や弱い立場の人々に少しでも貢献することによって、胸の中に小さな幸せがぼつと宿る。その種を大きくしていけば、国際協力が人生の意義を見出すような学生が、学部生の二割、三割と生まれてくる。そんな実感が私にはあります。大学院でも同じく実践的な教育を展開します。二〇〇四年に国際協力学研究科の修士課程を開設して、来年の四月からは博士課程がスタートします。

福島 日本の現状を見ると、世界的に見ればこんな豊かな国はないのに、日本がいい方向に向かって進んでいるかといえれば決してそうではない。連日マスメディアを通して伝えられるのは、悲惨な事件や企業の不祥事などいやなニュースばかりです。まさに公のために生きる精神、あるいは日本人が本来持っていた誇りや気概、やさしさなどがどんどん失われ、自分のためだけに生きていくような風潮が蔓延している。なぜそうなったのかを考えると、やはり一つは教育の問題が大きいと思うんです。

渡辺 そうですね。日本人が一番いい伝統を自らの手で捨てているという感じが私にもあります。北朝鮮による拉致被害があつて、世論調査でも圧倒的な制裁への支持があるにもかかわらず、また制裁を主張する安倍晋三さんなどに対する支持も圧倒的に高いにもかかわらず、国家が拉致された公民を救出するという、おそらく欧米にとってはごく当たり前の

渡辺利夫氏 昭和十四年（一九三九年）、山梨県生まれ。四十五年、慶応義塾大学大学院経済学研究所博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て、平成十二年、拓殖大学教授・国際開発学部長、十六年同大学院国際協力学研究所委員長、十七年同大学長・大学院長。著書は『成長のアジア停滞のアジア』（東洋経済新報社、吉野作造賞）、『開発経済学』（日本評論社、大平正芳記念賞）、『西太平洋の時代』（文藝春秋、アジア太平洋賞大賞）、『神経症の時代』（TBSブリタニカ、開高健賞）など。

ことを、日本という国はやっていない。相手の国のトップが拉致を認めているにもかかわらず救出もできない。教育がおかしいと同時に、国家自体が漂流していて、若者の心をつかむことができないでいるんですよ。

いまの政治家や産業界の指導者、マスコミで活躍している人々は五十代ぐらいの人たちです。日教組全盛時代に教育を受けた彼らは、戦前期の反動もあってのことでしょうが、公に生きることの価値にめざめることなく、「私」を重視するのみです。本当に日本の不幸です。「愛国心」という言葉さえ使いにくいという雰囲気はいかにも異常です。

開発と安全保障を合わせた国際協力学

福島 国際協力学研究科が来年四月に博士課程を新設するというのですが、大学院を中心とした教育改革の方向性はどういうものなのでしょうか。

渡辺 本学の大学院には経済学研究科、商学研究科、工学研究科、言語教育研究科の四研究科が設置されていますが、

いって人材が足りません。国際協力人材を育てるコースは日本各地にあります。これはみな大学院。私が狙っているのは国際協力の事業現場で額に汗して働く人間、現地の人と同じ目線で語りあえる人材の育成です。十八、十九歳から学部教育として国際協力の重要性にめざめる人材を育てたい。国際開発学部をつくった理由がそこにあります。

ODAについていいますと、アジアはもう国内資本と国内技術でインフラの整備ができるまでできています。ODA受け取り国としての地位を次々卒業しているのです。日本のODAの供与対象国は、今度はアフリカとか中東、ラテンアメリカの最貧国などに拡大していくことになりましょうね。そこではもちろんインフラも必要ですが、その前に学校や病院、保健衛生の問題ですとか、まさに緒方貞子さんがいうところの「人間の安全保障」にかかわる最も基礎的な分野が重点分野となります。これはお金はそんなにかけられない分、やたらと手間暇を食う。この手間暇に日本のいまの援助体制は耐えられない。貧困国の救済に人生の意義を見出す専門家教育機関で養成していかねばなりません。本来で

福島教子氏 津田塾大学芸学部卒業。中部日本放送を経て、昭和六十三年、独立.NHK、TBS等で報道番組を担当。テレビ東京「ビジネス維新」や週刊誌「サンデー毎日」での企業トップ対談など、メディアを通じて数多くの経営者への取材を精力的に行っている。経済の他、環境、地域再生など、現代社会の問題をテーマにしたフォーラムでも活躍。平成九年には（社）日本ソムリエ協会認定ワインアドバイザーの資格を取得。著書に「それでもあきらめない経営」「きまわりの悪い経営者が成功する」などがある。

アジアに顔を向けた国際的人材をつくるというのがこの大学の理念であるはずなのに、そういう色彩が非常に薄いかねてより思っております。そこで新しい大学院は国際開発学部と、地域研究に長い伝統を持つ海外事情研究所の二つをベイスに国際協力のための人材を育てるという方向を定めたのです。

もう一つは、いま安全保障がいよいよ重要なテーマになっています。イスラム諸国のラディカリストによる国際テロリズムの問題も、その基底にはイスラム諸国の貧困があります。アメリカやEUが中東やアフリカ支援に乗り出しているのはそのためです。開発と安全保障というテーマの二つを連携・融合させることによって、真に有効な国際協力学が成り立つのです。そう私は考え、国際開発と安全保障の二つの専攻をもつ国際協力学研究科を設立しました。院生の就職も国際協力機関などに決まり始めています。

福島 そういうところに力を注がれるのは、もちろん拓殖大学の歴史的な背景もあるでしょうが、日本の国際貢献を見ると、「お金は出すけど顔が見えない」などとよくいわれます。現状では日本の国際貢献のあり方は決して十分ではないし、世界できちんと評価もされてないと思うんですよ。そのためには、本当に有効な国際貢献をきちんとできる理論も、実践できる実行力も持っている人材を育てていきたい、という思いがおりになるのではないのでしょうか。

渡辺 日本は九〇年代を通じて世界第一のODAの供与国でした。金額ではトップでしたが、問題は人材です。率直に

あればこれは国家的な事業なんですよ。

くだいようですが、私は大学院ではなくて学部からそういう人間を育てたい。これだけ日本企業も世界中に進出しているんですから、開発協力の知識やノウハウは企業だって必要はずですよ。私は大学からでも遅いと考えているほどなんです。カナダや北欧では、小中高の段階から貧しき者を助けるのは人間としての義務だと教えています。これを「開発教育」といいますが、私は執行部を口説いて開発教育センターを学内につくりました。そのなかの「国際開発教育フアンリテーター養成コース」では、小中高の先生を集めて開発教育のスキルを学んでもらっています。

福島 学長はこれからアジアの中で、日本はどういう役割を果たしていくべきだとお考えですか。

渡辺 日本の「顔が見えない」という話が出ましたが、ODA事業の現場を年中歩いている私としては、決してそんなことはないと思います。中国、朝鮮半島は別として、アジアの国々からの日本のODAに対する評価には極めて高いものがあります。ベトナムなんかで調査すると、こちらが恥ずかしくなるぐらい高い評価をされていますよ。

日本のポジションは、相対的には下がってきていますが、それは当たり前のことです。アジアがこれだけ発展すれば、アジア全体の貿易や投資に占める日本のウェイトが下がり、中国、東アジア、ASEAN諸国の比率が上がるのは当然のことです。

けれども、経済力を国単位で量って何か意味があるのでし

よいか。例えば中国はIT王国だといわれていますが、中国のIT生産額の七割は台湾企業が担っています。台湾企業というのは、日本や欧米企業のOEM生産を中心としています。つまり日本を中心とした先進諸国のIT企業が台湾に入ってきて、その台湾の企業が日欧米の技術を背中にして珠江デルタや長江デルタに行って中国のIT産業を興しているという構図です。

そういう構図を見ると、国際的な経済活動を国境線で切つて、日本が何%、中国が何%だということ自体にはほとんど意味がありません。日本の企業が持っている経営資源をグローバルに、特にアジアという地域で最適に配分するにはどうしたらいいのか。日本の力量が問われているのはそこだと思いますね。

大衆化時代の大学

福島 最初にもお話がありました、これからどんどん少子化が進んで、大学が学生に選ばれる時代がくるわけですね。数ある大学の中で拓殖大学が生き残っていくために、どんなことが必要だと思われませんか。

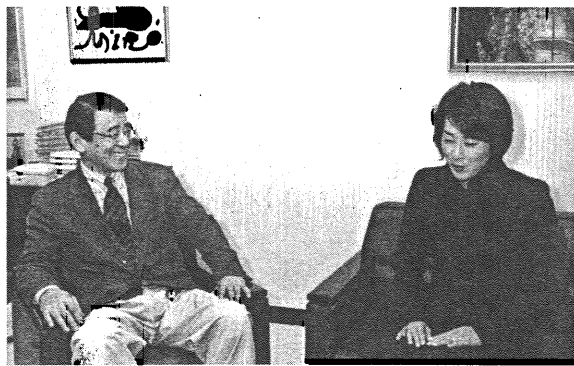
渡辺 学生にこの大学にきて本当によかったと思ってもらえる教育をやることです。それ以外に道はありません。学生たちの満足度を引き上げるために何が出来るか、目下私が全力で努力しているテーマです。

一番重要なのは一年生の時期ですね。大学に入って、初め

の教員の授業からノウハウを学ぶための教員相互の授業参観、教員の任期制や年俸制の導入などにも取り組んでいます。

福島 全入時代になれば、日本の大学の学力レベルの低下は避けられないですね。

渡辺 自身が大衆教育の中で育てられてきた若い教員は、大学大衆化の現実をもう十分にわかっています。しかし大学ではまだエリート養成時代の大学で育った六十歳前後の人たちが強い力を持っています。これではだめです。あと十年もしないうちにそういう人々もいなくなり、大学は大きく変わっていくと思います。大衆教育で特有のノウハウや特色を出した大学が生き残っていくわけですね。



福島 社会人をどう取り込んでいくかということも、大事になってくると思います。いくつになっても学びたいという意

て友達や教員と接する。不安な学生だっていっぱいいるはずですが。そういう学生たちに最初にオリエンテーションをやるわけですね。私どもの大学は河口湖でオリエンテーション・キャンプをやつて、教員と学生と一緒に寝泊まりします。これを出発点にして、入学した学生を少なくとも一年間懸命に育てることが肝心です。一年生ゼミを私どもはクラスゼミと呼んでいます。これを本格的なゼミナールが始まる二年目までつないでいくわけです。これに成功するかどうかが、私は決定的に重要だと感じています。

福島 いいスタートさえ切れれば、四年間一生懸命勉強しようというレベルに乗っかっていくということですか。

渡辺 そういうことです。かつて大学は、一生懸命勉強した優秀な人間が来る場所でした。その時代には、学生は自由に遊ばせておいてもしっかり勉強して卒業していったものですが、もう全入時代でしょう。昔ならとても大学へ行かなかった人間でも大学生になるわけですから、エリートを育てるなんて考え方ももはや大学は成り立ちません。ごく標準的な日本の若者のインテリクチャルレベルをどう引き上げていくか、というふうな頭を切り替える必要があります。いくら東大や京大が変わつても日本は変わらないけれども、拓殖大学が変われば日本は変わる、というのが私のメッセージなんです。

福島 日本のマジョリティの部分ですね。

渡辺 日本の平均的レベルの学生の満足度を上げるために、学生による授業評価の実施とその結果に基づく改善、他

欲を持った人を受け入れてくれる、そういう場があることは日本にとつて大事なことですし、大学にとつても生き残り策につなげていくと思うんですけれども。社会人教育についてはどのように考えていらっしゃいますか。

渡辺 アジアに特化した夜間の公開講座「アジア塾」は大変な人気で、社会人がアジアにこんな強い関心を持っていただのかと、かえってこちらが驚かされるほどです。その他「経営塾セミナー」「新日本学講座」、あるいは海外事情研究所の「国際塾」も、立地のよさもあってなかなかの盛況です。

十九年度からは大学院の全ての研究科で昼夜開講制を導入する予定です。社会人が三割くらいになれば理想的でしょうね。社会的要請に応えるために、大学院のカリキュラムをどう改善するか。学部は伝統的に積み上げ型のカリキュラムが中心ですが、大学院の方は思い切つて社会のニーズに合わせ、合わないものはどんどん切り捨てていく。二年に一回はカリキュラムを全面的に変えるくらいの気概を持ってやっていかないと、これからの大学院は成り立たないんじゃないでしょうか。

福島 大学冬の時代といわれますけれども、これから本当に学長の手腕が問われる時代ですね。

渡辺 「拓殖」という古いコンセプトを新しく解釈し再編集する。そういう知的な作業も、私に負わされた課題だと思っています。